

子どもと家族と学校と

⑥

『カウンセラーが教員の立場で大学生と接すると、、、』

CON カウンセリングオフィス中島

中島 弘美

大学で講義ををはじめて14年が経った。

依頼があった時、教えるというのは私には無理だと思っていたので、家族カウンセリングを専門にしているその現場の様子を伝えるので良ければ、と引き受けることにした。現在、四ヶ所の大学で授業を担当している。

共通教育(教養)科目や資格取得のための科目、専門科目、通信制のスクーリング、受講学生の数も15名だったり、100名以上だったり、講義は一回きりのものから、一日10時間のハード集中講義などさまざまな形式の講義をしてきた。

学生時代は、社会福祉を専門に学び、家族療法のクリニックに就職したこともあって、社福と心理にまたがるような科目を担当している。

多くの学生さんに出会っていると、教育よりも年々支援の割合が増えているように感じる。

大学で支援を実践しているように感じるとそれはそれでとても意義があるように思えてくる。

今回は、カウンセラーが非常勤講師として学生さんたちとかかわるなかで気がついたところを記してみたい。

講義のルール

「10分以上の遅刻は欠席扱いになります。この科目については、現場実習と同じだと受け止めて、遅刻欠席せずに来てください！」

第一回目の講義で、授業のルールや評価基準を説明し、受講態度についても注意事項をくわしく伝える。

私が出講している4大学のうち3大学で出席をしっかりとするシステムになっていて、科目によっては、15回の講義回数中、4回欠席したら再履修と明確に決まりがある。さらに出欠状況を把握するための会議があり、欠席回数の多い学生への対策が立てられることになる。

一回目の講義に出てこない学生は要注意で、二回欠席したら直接面談するなど、単位取得してほしい願いが含まれている上で、できるだけ遅刻欠席せず、すべて出席するようにと、強調している。特に、最近は学生が講義に出てこない状態にならないように配慮することが多くなった。

それは不登校の可能性があるからだ。

不登校というネーミングは、しっかりと知らない人もいることだろう。大学生は、もちろん義務教育ではないので、学びたいと意志があって進学している。不登校

という言い方は正確でないかも知れないが、登校したいと思っても講義室に入れない、昼休みをひとりですごせないなど、高校生の欠席理由とおなじような事情で、講義を休み、大学生活を続けられない学生がいる。

目的意識は？

「この大学に入学したのはどんな目的があったの？」

と尋ねると、推薦で入ったとか、行く大学を早く決めたかったからとか、担任からすすめられたからとか、就職先がなんとかありそうだからとか、目的意識が高くなって入学しているのは以前からか？とも思うが、反応があいまいだ。

「大学に進学することは、金額にすると1200万円の選択をみんなはしたっていうことだよ」

講義中に、ちょっと大げさな話をしてみよう。モチベーションを上げるためだ。

「私立大学の受験から卒業までの4年間にかかる費用は授業料など約300万円とするよね、もしも、高卒で就職をして4年間働いて合計約900万円の収入を得たとすると、大学進学を選択することは、差し引き1200万円也！」

数字を例にして説明をすると、真剣に聞き入っている。

大学に行って当たり前、親が授業料を準備するのは当然だと思っているようだ。中には、自ら授業料を払っている学生もいるが、多くは親任せ。だからこそ、その重みを実感できていないのかもしれない。

かつて、大学に来なくなる学生の中に

は仮面浪人と呼ばれ、一応、授業には比較的出席しているが、次のセンターテストの時期にもう一度国立大学などをねらうという人もいた。希望大学に届かなかったら、あきらめて今の大学の二年生になるつもりだ。

そんなややこしいことをしなくても、昨今、大学の編入制度や、入学後の学部変更も場合によっては可能なため、再度受験する人は多くは見られない。

かつて、〇〇大学中退でも、世の中である程度評価されるような時代はあった。入学することができたその実力を認められてのことだった。大学を卒業しても、就職先がないとなる現在は、大学中退はさらに不利になるだろう。

そのため、できるだけ退学しないようにと、学生に理解を求めることになる。担当教員は、出席時間数が不足すると、単位取得の資格が無くなるので、事前に、その可能性があることを予告している。

学生さんからすると、うっとうしいということになり、欠席のことを話題にしすぎると、個人の事情を持ち出してきて、単位落とさないで下さいお願いしますと、頼まれてしまう。

大学生の欠席理由

あと一回欠席すると、単位取得ができなくなることを伝える。

「僕、店長をしているので、休めないんです！」

はてな？何を言っているのか意味がわからない。詳しく聞いてみると、アルバイト先で、責任ある仕事についているので、アルバイトは絶対に休めない。その

結果、大学の講義に出られない。欠席回数のことを言われても、アルバイトが休めないで、落とさないでほしいという。

彼の基準は、アルバイトが中心。あまりにも真剣なので、将来はそのアルバイト先に就職するつもりなのかと確認すると、労働条件がよくないので、就職する気はないという。

アルバイトに責任をもっている姿勢はわかるが、学生の立場だと許してもらえらるとおもって頼んでいるのか、ただわかっていないだけなのか、ちぐはぐな態度に驚いてしまう。

欠席日数が超過しそうになってから、話し合いをしてもどうすることもできないので、講義の最初に念押しの説明をすることになる。

教えてもらってわかること

私が大学生の時に教えてもらって知ったこと分かったことが多くあった。注意されないでいると、そのまま非常識な態度を続けていたことだと思う。

ある総合病院の相談室で、メディカルソーシャルワーカーの助手の仕事をさせてもらうことになった。たいした仕事はできなかったが、それでも電話対応や資料整理などをさせてもらっていた。医療福祉の現場にいたことがうれしくて、私なりに一生懸命だった

朝九時からのアルバイトは遅刻せずに、行っていた。しかし、

「九時までに出勤するではなく、九時までにモップ掛けやテーブルの掃除を済ませてほしいので、もっと早く来てください」と注意を受けた。

契約時間は九時からなので、間に合うように行っていたけれど、それではだめなんだと、わかった。

いまふりかえると、ごく当たり前の指摘だが当時は、仕事のイロハを知らず、このバイトで働く上での基本をいろいろと教えてもらった。

教えることが予防につながる

おせっかいだと感じる学生も多いと思うが、学生さんにエチケットや礼儀のようなものを意識して伝えるようにしている。

「社会福祉施設見学に行くときは、裸足で行くのはだめ。靴下をはいて、かかとのある靴で行くこと。パンツとか下着が見えるような格好もしないでね。わかっていると思うけれど、利用者さんにあったら、ちゃんとあいさつするんだよ」

完全に母親口調になっている。

前もって伝えておかなければ、それぐらいわかっているだろうと思っても、勘違いをしている場合もあり、あとで大慌てをすることになる。

受け入れる側もよく心得たもので、特別支援学校の実習生対応をきくと、除光液やかみそりなど用意して、マニキュアをとってひげをそって身支度を整えてから、教室に入ってもらうようにしているという。

誰かがちゃんと教えてあげなくてはいけない、教えられて、わかったことが何かの予防につながることもあるかもしれないので、今は、学生さんが社会人になるまえの準備期間につきあっているつもりでいる。

特別な配慮

ある学生さんが、五回連続で欠席したあと、六回目の講義で初めて出席。

「卒業したいのでなんとかしてください、この科目の単位を落としたら、とても困ります。診断書を提出するので配慮してほしい」

真顔で訴える。

さぼっているのではないというのは理解できるが、そういわれても、非常勤講師になんとかする力量はなく、生半可な返事もできないので、担任教員に相談してくださいと伝える。

学生の中には、身体に何かの障害がある人もいるが、講義に出席している時間中に過呼吸や持病の発作が出て、保健センターに付き添うこともある。絶対に休んではいけない講義なので、高熱にもかかわらず、出席して、倒れてしまう学生もいる。

少し休んで回復するとほっとするが、精神疾患などにより大学生活の継続が、困難になっている学生には、たとえ診断書を提出した場合でも、対応の限界があり、残念ながら休学手続きをとる学生もいる。

退学や休学にならないようにと、平常の講義で、学生の中に何かきになるものを感じると、さりげなく本人から事情をきいたり、

「私が知っておいた方がよい事情などがある人は、言いにきてください」

と伝えている。

休み時間に話にきて、クラスの学生さんが、ある学生さんの気になる事情をし

らせてくれることもある。

あかん彼氏とつきあって、ふりまわされているとか、パチスロにはまって、友達に借金しているみたいなど、親が知ったら、心配するような話も出てくる。

けれど、友人がいて、なんとかネットワークを持っているとわかると、ちょっとは救われる。

キャンパスワーカー

現在、大学では、学生支援のためにキャンパスワーカーを常駐させるところがある。まだまだ広がってはいないが、増加傾向だ。

全ての大学にワーカーがいて、その専門性が発揮されると良いと思っている。ただし実情は、大学の予算の都合で、実現できていない。

義務教育機関にスクールソーシャルワーカーが導入されているので、将来に期待したいものだ。

そのころには、他の教員にとっても、それぞれの研究に今よりも深く取り組むことができることなるはず。

「私カウンセラーになりたいんですけど、」

と学生がやってくる。

「専門性を本当に身につけたいと思っているのなら、大学での勉強では足りないところもあるので、大学院に行くことを考えてみて」

と勧めている。

専門の勉強は大学ではなく、大学院に入学することで、学問とは何かを学ぶことになるだろう。